

日本海酒田から北前船がもたらしたものの第7号全国版

平成 28 年 9 月 6 日 赤穂市教育委員会提出

今回は、北前船寄港地を日本遺産に申請する山形県酒田市からの話です。



河村瑞賢銅像。酒田市、日和山公園



大信寺の大西家のお墓



酒田港にある田淵文治朗名の常夜灯



常夜灯前の筆者

酒田では北前船に詳しいガイドの豊岡さんにお会いしました。豊岡さんは江差で高校の教師をされていた方で、北前船とは縁の深いお方で、自転車で効率的に市内を案内をして頂きました。最初の案内が北前船航路を確立した河村瑞賢の銅像がある日和山公園でした。そこには立派な常夜灯の南側に播州坂越、田淵文治朗の名があり、北側の文字は消え判明できませんでしたが「酒田ジュニア版歴史的教科書」から播州坂越と高田屋の文字がわかりました。田淵美術館のパンフレットでは赤穂で1673年より塩田、塩問屋、廻船業を営み文化文政時代(1804～1830)には日本最大の塩田の持ち主だったと案内しています。常夜灯は1813年が建立で日本最大の塩田の持ち主だった時期でした。この播州坂越の地名から田淵家も坂越港から塩を積み出していた論拠になります。これまで赤穂塩は坂越港から江戸への塩廻船が定説でしたが、酒田つまり北前船でも塩の廻船をしていた事がわかりました。

酒田市資料館で偶然会った、庄内酒田古文書館の杉原館長から、つい最近になって新たな多量の古文書が発見されたので、坂越や赤穂塩の事で新たな事実がわかるかも知れないと教えて頂きました。今後に期待したいと思います。この日(9月1日)資料館から野村さんが、東京の文化庁で、北前船の日本遺産申請についての会議に出席されていたので、進捗状況等の話は聞けませんでした。この時これまで赤穂市教育委員会に提出したA4版を冊子風にしてお渡しました。11月江差である北前船フォーラム迄に、野村さんから瀬戸内海からの応援メッセージとして日本遺産推進の最高責任者の方にお渡しして頂けるようお願いするつもりです。

この後は酒田美術館の北前船寄港地フォーラムの議長で発案者の石川館長を訪ね、学芸主幹の熱海氏から話をお聞きした後、北前船日本遺産応援饅頭と共に A4 版をお渡し、瀬戸内の坂越まち並みを創る会の北前船の取り組みを宣伝して頂けるようお願いしました。

その後、大西家のお墓が残る大信寺へ行き住職とお話をさせていただきました。墓地は広大でしたが、酒田市史で述べられていた多国船墓地と確認出来るものはなくなっておりましたが、大西家の元禄期のお墓と残り数名の大西の名刻んだお墓のみ残されていました。お墓に手を合わせた時、かつての坂越の人の活躍と苦難を坂越の人達にも伝えねばと思いました。

赤穂塩の日本海側の足跡は、新潟五十島村渡辺文書に 1768 年の 1 年間に取引された塩は 17 万俵余りとの記録があり、竹原塩の塩は 1 両あたり 12 俵余り、赤穂塩は 15 俵との記述がありました。更に新潟県史には、80%程が竹原と播磨との記述から、この時代の越後では、竹原、播磨からの塩が年に 14 万俵程酒田に運ばれたこととなります。赤穂版 6 号で播磨塩の多くが赤穂だったとする根拠として佐渡に残る文書から見て取れます。更に山形県史、翌日行った秋田図書館にある「秋田海岸における製塩の推移」でも生産効率の良かった赤穂塩等、瀬戸内の塩で秋田地方の塩の生産に打撃があった記述がありました。

このように坂越が北前船で活躍出来たのは、赤穂塩と日本海側の塩には驚く程の価格差があった事、そして多量の塩の生産が出きる塩田の開発を早くからしていたからでした。赤穂市教育委員会の発表資料にも、赤穂藩初代藩主浅野長直が入封した 1645 年には、すでに塩田開発が行われていた事が『播州赤穂三崎新浜村沿革略記』に述べられており、1646 年に姫路藩の塩田村から移住してきた塩民によって、戸数 189 軒、人数 1,214 人にまでになったと述べられています。こうして多量に生産されるようになった赤穂塩はその品質が他に勝り、価格が格段に高かった日本海側にまで販路を求めたのが赤穂の塩生産者そして坂越の廻船業者だったのがわかります。

酒田市史には大信寺の他国船墓地には酒田で遭難や病気で客死した人のお墓の、一番古いものが 1665 年で、それが坂越の廻船業者の方だと書かれていた事から坂越の北前船は 1660 年代前半頃から塩等を運んでいたようです。青森の野辺地民族資料館にある客船帳には 1821 年頃の大西家の記述があった事から、この頃まで北前船として、赤穂塩等を津軽、松前等にまで運び赤穂藩の財源に側面から協力していたようです。松前については、大西家に残る板書(船賃銀定法)に松前までの船乗りの賃金が掲載され、松前町史にも播磨塩の文言があったからです。

終わりに荘内日報の富樫論説委員長を訪ね、坂越まち並みを創る会の北前船の取り組み

みについてお話し、酒田からもご当地自慢を語って欲しいとお願いしました、富樫氏は心よく協力して頂けました。東京の新聞協会の了解がえられれば第8号の全国版で掲載出来る事になるかもしれません。

投稿者矢竹考司(赤穂塩と北前船調査委員)
発行者門田守弘(坂越まち並を創る会会長)